

子育て支援における児童虐待予防と
母親の育児不安の悩みと解決方法について
－大学内の子ども家族支援センター来所の
親子にむけた支援方法から－

千葉千恵美, 正木 光裕, 富澤 真希, 大塚 真理

From child abuse prevention and problem-solving measures
in child-rearing support
－ About support methods for parents and children
visiting the child and family support center on campus －

Chiemi Chiba, Mitsuhiro Masaki, Maki Tomisawa, Mari Otsuka

高崎健康福祉大学総合福祉研究所紀要

健康福祉研究 第21巻 第1号

2024年12月

《特別寄稿》

子育て支援における児童虐待予防と 母親の育児不安の悩みと解決方法について —大学内の子ども家族支援センター来所の 親子にむけた支援方法から—

千葉千恵美¹⁾, 正木 光裕²⁾, 富澤 真希³⁾, 大塚 真理³⁾

高崎健康福祉大学設置の子ども・家族支援センター（以下支援センター）は、2006（平成18）年以來、大学近隣の住民に地域貢献の一貫として近隣住民に支援を行ってきた。特に育児不安や育児ストレスを解消に向け「親子ふれあい教室」の講座を開講し、0歳から3歳未満の未就園児の親子には、親子遊びや育児相談等に関わり、子育て支援を実践してきた。

今回報告する研究は「ベビーマッサージ講座」と「療育指導が必要な親子ふれあい教室」2講座を提供し、その効果について報告をする。研究1は事例1, 事例2の2組の親子に「ベビーマッサージ講座」を紹介し、活動前後における日本語版POMSTMを用い比較検討を行った。研究2は、重度の障害を持つ子どもとその親にむけた「療育指導が必要な親子ふれあい教室」を開講し、参加親子9組9名の母親から育児不安の聞き取り調査と併せPACAP, PACAP-Bを用い行った。結果として、研究1は（事例1）（事例2）2組の親子に関して母親の気分変化が顕著に見られた。研究2では、語る内容から3つの質問事項と回答が示され、子育て支援の必要性を明らかにした。

キーワード：児童虐待防止、母親育児の不安、子どもの特徴、子育て支援、親子の関わり

I. はじめに

2023（令和5）年「こども家庭虐待等要保護児童事例検証に関する専門委員会第19次報告」では211,710件に達し過去最多となった。その一方で国は児童虐待防止に関する施策や児童福祉法一部改正、子ども基本法等、子ども大綱等で児童虐待防止に向け支援策を示したが解決策は見いだせない状況下にある。

今回示す研究1では、支援センターの支援者によって発見された気になる親子に向け、「ベビーマッサージ講座」を取り入れた。又研究2の研究では「療育指導が必要な親子ふれあい教室」の講座に参加した重度の障害児を持つ母親を対象に、母親の抱える育児不安や子育て支援に向け検討した。この2つの研究報告をする。

II. 研究倫理について

研究1は「ベビーマッサージ講座」2020（令和2）年研究番号（2221号）で承認された研究で、研究2の「療育指導が必要な親子ふれあい

¹⁾ 高崎健康福祉大学人間発達学部子ども教育学科

²⁾ 高崎健康福祉大学保健医療学部理学療法学科

³⁾ 高崎健康福祉大学子ども・家族支援センター

教室」は2023（令和5）年研究番号（2318号）で、研究1、研究2の両方とも高崎健康福祉大学の研究倫理委員会で許可された研究である。

Ⅲ. 実施期間と場所

1. 実施期間

研究1の「ベビーマッサージ講座」で実施した事例は2組おり、事例1、事例2に分類した。事例1に関しては2020年5月、6月の2か月間実施した。事例2に関しては、2020年10月、12月の2回実施し支援を行った。

2. 対象者

1) 研究1について

2020年5月から12月までの期間で参加者親子は2組の4名で、2名の母親を対象にした。

- ① 事例1の母親の年齢は32歳で子どもは男児で第1子の長男2歳であった。
- ② 事例2の母親の年齢は34歳で、子どもは女兒で第2子の次女3歳であった。

2) 研究2について

2023年5月より11月まで（8月を除く）14回「療育指導が必要な親子ふれあい教室」を実施した。参加親子は14組20名の親子の参加があったが、子どもの体調不良により継続して参加出来た親子は9組18名で9名の母親を対象にした。

3. 実施場所

研究1の「ベビーマッサージ講座」、研究2の「療育指導が必要な親子ふれあい教室」の両方の講座は共に8号館1F子ども・家族支援センタープレイルームで実施した。

Ⅳ. 研究の概要・目的・方法について

1. 2つの研究の概要及び目的

研究1、研究2の2つの研究は、どちらも支援センターの活動であり、支援センターで対象者に向けて考案した講座である。母親達が抱える育児不安と悩みは、児童虐待防止を考慮に入れた支援内容となっており、親子遊びを中心に活動を提供してきた。研究1では集団活動で参加出来ない親子に向けて「ベビーマッサージ講座」の活動を実施した。活動内容は月1回1組限定にして、親子の相互作用が展開出来るように、母親と子どもが向き合いベビーオイルを用い手足に触れる等の関わりを取り入れ、親子で安心して楽しみ、60分程度の活動を提供した。参加した2組の親子の事例1に関しては子どもの発達特徴（ADHD傾向とASD傾向）があり、母親はこの特徴があるが故に育児不安を抱えていた。今回の研究2は、医療的ケアを必要とする重度の子ども達で、脳性麻痺を含む重度の自閉症スペクトラムの子どもであった。母親達を対象に育児不安や育児の悩みや児童虐待傾向の有無について調査目的にした。

Ⅴ. 研究1について

1. 研究1の概要と目的

2020（令和2）年4月では、全国的にコロナ禍中にて、支援センターの活動そのものを休止せざる負えない状況となった。この中で日々支援センターを利用し遊びに来ていた親子から、活動再開の依頼のメールや電話が支援センターに殺到した。母親から密閉した部屋にいると子育てを怒ってしまう等の訴えが大半だった。そのため2020（令和2）年9月から、感染防止対策を昂じ、参加人数を2組に限定し「親子ふれ

あい教室」を再開した。2021（令和3）年から人数を増し、結果的には8組の親子が活動に参加した。この8組の中に今回示す2組の親子が支援者の目が留まった。1組目の事例1は、子どもの発達特性に課題があり、母親は活動中、常に泣いてばかりいる子どもの行動に目が向き、不穏な状況であった。2組目の事例2の親子は、母親が常にイライラした状況で子どもと向き合えない状況が伺われた。周囲の親子とは離れ、親子遊びに参加していなかった。その為この2組の親子への関係性を改善する目的に「ベビーマッサージ講座」を取り入れ、親子のスキンシップ等が体験する支援を実施した。

2. 研究方法について

1) 研究1について

事例1は、明らかに子どもの発達の特徴であるこだわりがあり、これらの行動が見られ見知らぬ場所、人達がいる事が子どもには苦痛で、不安を掻き立てる要因になっていた。その為本児は大泣きをする事で不安状態を表現していた。活動を始める前から大泣きをして支援センターに入室していた後もしばらく続いていた。母親は親子で楽しく活動に参加出来ない事に心を痛め、この状況を後ろめたく、寂しい思いで、参加する他の親子に気を使っていた。

事例2は本児の問題ではなく、むしろ本児の姉である長女をめぐる問題が母親を悩ましていた。毎朝長女の幼稚園送迎に手間取り、常に時間ギリギリとなり、自家用車で長女を幼稚園まで送迎していた。その為必要以上に時間が係り、イライラした状況で次女（本児）の育児に携わっていた。そのため支援センターでの親子の遊びにも常にイライラした様子があり本児との関わりも、安定していない様子が伺われた。この2

つの事例1,事例2は「ベビーマッサージ講座」の外部講師より、事前に講座内容には、親子の関係性を深め、維持するためのリラクセス効果がある講座である事等、説明を口頭で伝え、方法にはベビー人形を用い、モデルとする活動を示し実施した。支援センターの保育士が見守りこの一連の流れに添う実践を行った。又活動の前後で2回POMSTMの尺度を用い、母親の気分変化を調査した。事例1は前半5月と6月の2か月実施し、事例2は後半10月12月の2回計参加し実施した。

3. 研究1の結果

1) 事例1について

初めての体験や集団で行う活動には激しく抵抗を示し、大泣きをしていた本児が、「ベビーマッサージ講座」の活動では、静かに本児は母親の膝に乗り、大好きなミニカーを右手に離さず、母親から受けるマッサージを快く受け入れ、協力的に左手、左足を実施する事が出来ていた。1組限定によるこの講座に本児は、嬉しそうな表情を見せ、時折母親の表情を確認し機嫌よくマッサージを受けていた。母親は本児が泣かず、にマッサージを受ける姿に安堵し、日頃の活動とは違う穏やかな活動内容になっていた。本児と母親は2人で安定した関わりをゆっくりと流れる時間をむしろ堪能していた。又2人の関係性が安心して満ちた関わりになっているのが観察された。尺度には、日本語版POMSTMを用いて分析を行った。数値においてはT-A（緊張・不安）A-H（怒り・敵意）の比較において差がみられた。特に2回目においてはV（活気）が高まっていた。

2) 事例2について

本児よりも長女に課題があり母親には改善策

表1 事例1 第1回目 2022(令和4)年5月

事例1	T-A	D	A-H	V	F	C	Total Mood Disturbance
1回目 5月	緊張・不安	抑うつ	怒り・敵意	活気	疲労	混乱	
ベビーマッサージ講座：前	2	6	1	13	1	4	1
ベビーマッサージ講座：後	1	6	0	12	0	3	-2

表2 事例1 第2回目 2022(令和4)年6月

事例1	T-A	D	A-H	V	F	C	Total Mood Disturbance
2回目 6月	緊張・不安	抑うつ	怒り・敵意	活気	疲労	混乱	
ベビーマッサージ講座：前	4	2	3	13	0	5	1
ベビーマッサージ講座：後	0	0	0	19	0	2	-17

が見い出せない状況だった。母親は毎日続く幼稚園登園時の行き渋りに、悩みを抱え疲弊していた。特に集団に入れない長女の行動は、幼稚園の適応していない状況に、母親は深く悩んでいた。長女にはこだわりがあり、好きな遊びは集中して遊ぶ事が出来ていたが、クラス内等の活動や集団で何か作る等の活動には参加せず、強制されると抵抗し集団から孤立していた。母親は長女の状況を心配し幼稚園教諭に相談していたが問題解決策に至っていなかった。この背景が本児の育児に深く影響を及ぼしていた。母親は毎朝憂鬱な状況下で幼稚園に長女を送り出した後、本児を連れて支援センターに遊びに来ていた。その為母親はイライラした感じと怒りモードで、不機嫌な様子が見受けられた。1組限定の「ベビーマッサージ講座」には、快く

参加した。活動開始当初は、本児と母親の2人の関係性は単純にオイルを塗るだけで互いの関係もぎこちなさが観察されたが、時間が経つにつれ、顔を見合わせる等2人の関係性に変化が見られ、母親が施すマッサージを本児は笑みで受け、母親の表情も変化しにこやかに本児の顔を見る等の心地よい穏やかな時間に変化していった。1回目の調査では、変化は見られなかったが、2回目前後では、親子の関係性に変化が生じ、母親が本児をしっかり見つめオイルを本児の手に塗ると、本児も母親にやさしくふれられる感触を楽しむ表情を見せ、親子の関係に変化が見られた。長女の問題は残っているが、母親と本児の関係性は、互いに感じ合う等関わりに変化が生じた。気分評価尺度である日本語版 POMSTMでは全体的な数値評価の改善は変化が

表3 事例2 第1回目 2022(令和4)年10月

事例2	T-A	D	A-H	V	F	C	Total Mood Disturbance
1回目 10月	緊張・不安	抑うつ	怒り・敵意	活気	疲労	混乱	
ベビーマッサージ講座：前	0	1	3	6	4	3	5
ベビーマッサージ講座：後	0	1	3	5	5	4	8

表4 事例2 第2回目 2022(令和4)年12月

事例2	T-A	D	A-H	V	F	C	Total Mood Disturbance
2回目 12月	緊張・不安	抑うつ	怒り・敵意	活気	疲労	混乱	
ベビーマッサージ講座：前	0	2	3	5	5	3	8
ベビーマッサージ講座：後	0	0	3	5	5	3	6

あまりなかったが、2回目前後では、D(抑うつ)の数値は改善されていた。

VI. 研究Iの考察について

母親との安定した関係性を作る事が必要であり、今回示した事例1、事例2についても同様に、母親と子どもとの安心した関わりの形成を作る事が必要であった。愛着形成については(J. Bowlby)が示す特定の人物との間に情愛的な絆を結ぶ関係性や、特定の養育者(母親)との間にやり取りの中で作られる相互作用が、この事例1、事例2で生み出されていた。今回の事例1、事例2に見られる乳幼児からの発するサインを上手く読み取れない場合、ベビーマッサージのように、直接乳幼児の身体に母親がふれる体験が貴重で、ふれられる事によって得ら

れる心地よさを体験する支援が効果に繋がっていた。それは母子間で感じる唯一の関係性で、親子の絆づくりに生かすツールにも繋がっていた。母親自身が子どもにふれて感じる心地良さが同時に、子どもも母親にふれられる体験を心地よい感覚を体得していた。同じ空間で一定時間安心した時間を穏やかに過ごす事も、育児不安を抱える親子の関わりの改善方法に繋がっていた。

事例1、事例2の関わりで得られた共通事柄には、安心して親子でゆっくりと流れる時間を作る事から始まり、この経過をきっかけに守られた空間と安心して関われる母親の存在が子どもの心に通じ、その後の親子の関係に深く関係していた。このように母子関係が1つのツールによって展開していく過程が必要であった。母

親と子どもだけの空間や場所から得られる穏やかな時間と関わりには、事例2に見られた母親にはイライラした感じが薄れ、怒りモードも消え、子どもを温かく見つめる視線も出来ていた。日常的に母親が感じる育児不安の発見とそこに繋がる児童虐待への予防策にむけた支援となり、この事例1、事例2の2組の親子には親子の母子関係の改善に効果が見られ、支援方法に繋がっていたと考察が出来た。

今回示された子どもの発達特徴を穏やかに受け止め、子どもの思いを感じるセンサーが母親側に出来てきた事も大きな効果があった。このように子どもの不安を感じ取り、察するセンサーを得られるような支援の重要性も示された。

Ⅶ. 研究2について

1. 研究2の概要と目的

「療育指導が必要な親子ふれあい教室」に参加した医療的ケアには、経管栄養を使用している重度の脳性麻痺の障害と重度の自閉症スペクトラム児を持つ母親の参加があった。子ども達をキャスターに乗せ、楽しみに遊びに来ていた。参加した子どもと親を対象に、現状の子育て状況の聞き取りから調査を実施した。調査には事前に説明を行い、時間に限りがある事から母親から直接話を聞きたい3項目を伝え、それに添った形で開始した。

日頃から支援センターには、色々な親子が遊びに来るが、重度の障害を持つ子どもと母親には支援センターも初めての体験で、手探りの状況から始めた活動実践であった。

2023（令和5）年度5月から母親達の依頼を受け「療育指導が必要な親子ふれあい教室」講座が開講した。この講座では、通常の親子とは

全く異なり、随時経管栄養や酸素濃度を調べる機器、痰の削除に伴う機器を持参し来室していた。活動参加を楽しみにしている様子であったが、天候や思わぬ体調不良によって、活動に参加出来ずに1回で終わる親子も中にいた、そのため継続的な関わりが難しい状況の中で参加してきた親子への支援を目的に実施した。

2. 研究方法

母親達の育児本音のへの思いや日々の生活で感じる育児への聞き取り調査と客観的な母親達の思いを調査するために15分程度の簡単なPACAP-B、PACAPの尺度に用いた。

実施期間は2023（令和5）年5月より8月を除く11月までの月2回水曜日の3限目時間（13:00～14:30）を定期的に設定し、計14回14組の親子20名が参加した。参加した親子の内、回答が得られた親子の9組18名の母親9名を対象にして調査を行った。

又今回は重度の子ども達である事や脳性麻痺で寝たきりの子ども達が参加する状況から、小児領域のリハビリに専門家である本学保健医療学部理学療法学科教授に活動参加を依頼し、運動遊びを入れた活動を実践した。活動計画に関しては、保育方法論の一部として学生を参加させ手遊び、歌遊び、絵本の読み聞かせ等、組み合わせた遊びの支援と活動のまとめとして参加した母親より話をする内容として賞味90分の中に支援計画に入れ提供した。

3. 研究2の結果

1) 聞き取り調査結果

育児状況から活動開始前後支援センター内での聞き取り調査を行った。内容については以下3項目について面接場面聞き取り調査を行った

- ① 今子育てで困っている事はなにか
- ② 今までの子育てについて思う事はどのような事があったか
- ③ 今後の子育てについて望む事にはどのような事があるか

これ等の項目についての聞き取り調査を実施した。

①回答について

- ・出産後1週間目で自宅に戻った矢先、高熱を出し、熱性けいれん発作を起こし救急搬送をされ、それ以来医療のお世話になり続けている。医療とは切り離せない状況である。
- ・出産時仮死状態で生まれ、医療技術で助かった命だが、子どもを育てる為の方法に何が正解であるか分からない状況が続いている。子どもの障害を考え眠れなくなった（不眠）。
- ・脳性麻痺で出産した際、医師から低酸素状態で「脳が真っ黒になっていたため、視聴覚や脳の機能は回復できる状況ではないと言われた」。将来を思うと不安になり気持ちが落ち込んでしまう事が度々あった。
- ・親が今元気で動いているが、高齢化し子どもが生きている場合の事を考えると不安になる。
- ・国の制度政策がその時々の方角性によって変わる事が心配、継続して支援をしてほしい。

②回答について

- ・今だからこのように他のお母さん達と話が出来る、笑っているが、当時は泣いてばかりいた。
- ・一人だけ取り残されたような感覚を持ち、とても孤独だった。
- ・夫や配偶者、パートナーに相談しても協力してくれず解決策は見いだせず、子どもの顔を見ず毎日は泣いてばかりいた。
- ・自分の事を考える余裕はなく、病院通いと子

どもの体調の維持に時間が取られ、当時を振り返るとただ時間だけが過ぎていた。

- ・同じように重度の障害を持つ子どものお母さん達に支えられ、励まされ、ようやく前を見れるようになった。
- ・日々体調の変化が起きてくるため、子どもをここまで育てるのが本当に大変だった。
- ・重度の障害を持った子どもであるけれど、日々子どもの様子から、子どもなりのゆっくりした育ちや発達を感じる事が出来るようになった。
- ・妊娠中からすでに、障害があると告知されていたが、出産直後は本当に障害があるかどうかはわからなかった。しかし、実際育つ過程で明らかに障害がある事を突き付けられた。

③回答について

- ・成長している姿やこれからの様子を見守りたいと思う気持ちが強くなった。
- ・命は助かったものの、結果的に重度の障害を背負う形になってしまったが、子どもの生きる力に勇気もらい、これからも一緒に生きてみたいと思う気持ちになった。
- ・重度の障害のある子どもを育てていく中で、この子どもに必要な支援や親としてやるべき事を全部しようと考えるようになった。
- ・健康な子どもが親子で遊べる場所が多くあるが、このように医療的ケアが必要な子どもが遊びに行ける場所が本当に少ない。重度の子どもが楽しく遊べる場所を作ってほしい。
- ・ママ友との語らい場所もなく、病院で顔を合わすくらいで親しくなる機会がなく、母親が集まり集える場所を作ってほしい。

これらの内容等が聞き取りから母親の語りとして示された。

2) PACAP, PACAP-Bからのアンケート調査結果 (n = 9)

この尺度は、乳幼児の発達の行動に焦点を当て児童虐待傾向を見つける尺度である。また日常的に世話をする親が質問に得られた得点で、分析から見える生活環境の中で子どもと母親関係性が見える尺度である。対象年齢に添い0歳から2歳までPACAP-B、3歳児以降PACAPを使用した。質問内容は共通項目の18項目について取り上げ、児童虐待防止の観点から整理する事が出来た。PACAP-B、PACAPでは、母親が育児不安や子育て状況適応を記載した項目を点数化し、得点とリスク得点に分け、その結果を示した。調査結果では、適応得点において9名中7名が疑問群に入る数値となった。ここで示された疑問群の内訳は、12点が2名、13点が1名、14点3名おり、正常群8点においては2名だけであった。またリスク得点に関しては、対象者9名の母親の全てが疑問群に入り、14点が2名、16点が3、名19点が1名、特に高い数値であり20点が1名、21点が1名、23点が1名という非常に児童虐待傾向群の対象となる結果

が示された。

3) 聞き取り調査結果とPACAP, PASCAP-Bからのアンケート調査結果

聞き取り調査では、主に今までの障害を持った子育てにむけて語ることが多く示された。特に仮死出産状態で助かった生命である事や、その後の医療技術進歩によって救われた生命を示していたが、実際その後の後遺症状況で、重度の障害を追った子育ての大変さが語られた。更に出産時には正常で生まれながら、発達途中の段階で疾患によって後遺症を持った事等が母親達から語られた。医師からの告知を受けた際、子どもの状態に言いようのない悲しみに置かれながらも、母親が1人で子どもを背負い孤軍奮闘し子育てしてきた事も語られた。その中で配偶者やパートナーからの協力支援が得られず、孤独の中での重度の障害を持った子どもの世話や日々必要な医療的ケアの状況下で、子育てを孤独の中で対応してきた事も明らかになった。医師からの告知を受ける中で、家族全員で障害を持った子どもを育てる方向で動いた等、前向

表5 PACAP, PACAP-Bの調査

適応得点 PACAP-B	リスク得点	疾患の状況及び活動への希望
1. 疑問 14	疑問 14	遺伝性の病気 学生に障害児を理解してほしい
2. 疑問 12	疑問 21	遺伝性の病気 活動が毎回楽しみしている
適応得点 PACAP	リスク得点	疾患の状況及び活動への希望
3. 正常 8	疑問 14	ダウン症 右目白内障 言葉で伝えるようにしている
4. 疑問 14	疑問 19	自閉症スペクトラム 手遊び等音楽が楽しみである
5. 疑問 13	疑問 16	遊び場を模索 学生に障害児を理解してほしい
6. 疑問 14	疑問 16	出生時低酸素脳症 活動を楽しみにしている
7. 疑問 13	疑問 16	脳性麻痺 学生に障害児を理解してほしい
8. 正常 8	疑問 20	出生後2週間後高熱による脊髄脳膜炎 活動が楽しみ
9. 疑問 12	疑問 23	自閉症スペクトラム 学生とのふれあいが楽しい

きに出来る限りやれる事を心掛け、子育てを実践してきた事も語られた。

このように子育てに関しては、試行錯誤を続ける中で、何が正解であるか分からず、色々人を頼りに手探りで子育てを行ってきた事や、同じ障害を持つ子どもの母親達に支えられ育ててきた経緯が語られ、前向きに捉えて考えて生活していこうとする結果が示された。

しかしその一方でPACAP、PACAP-Bの結果では、具体的な子育て状況が示され、必ずしも肯定的な部分だけではない事も判明した。調査に協力した母親の大半が子育て疑問群に入り、リスク得点においては全員が疑問群に入る等、聞き取り調査による語られた事柄以上に子育てが大変である結果が示された。

母親達の置かれた環境や生活課題を考えると、生涯背負う子どもの障害への悩みや将来起こりうる親の高齢化の現実に向ける対応の難しさや、いずれ来る親が老いる中で子どもの将来を肯定的に受け止められない悩みが示されていた。同時に国が打ち出す障害児者にむけた施策についても、同様に今後の継続支援の有無について不安材料に揭げていた。特に母親の悩みでは子どもの将来を考えると不眠になる等の母親のメンタルヘルスの必要性が示され、母親支援の必要性が示されていた。更に現在困っている事については、重度の障害がある子どもが行ける遊び場の確保と子どもの成長に伴う進路について等が示され、子ども達の育つ環境を含む様々な人とのふれあいも望んでいる事が示されていた。

VIII. 研究2の考察について

「療育指導が必要な親子ふれあい教室」で実際に聞き取り調査と尺度を使ったPACAP-B、

PACAPのアンケート調査が出来たのは9組の親子で9名の母親達だった。健常な子ども達とは異なり、医療的ケアが必要な子ども達の大半が脳性麻痺の後遺症と経管栄養や痰の吸引が必要な状況であり、常に酸素濃度を測る機器と併せ、吸引機器を持参していた。子ども達の様子からは、学生と直接的なふれあいを楽しみに、横たわりながら学生が行う季節の歌や絵本を見る等の活動参加が出来ていた。その一方で気候や湿度も健康状態に大きく影響し、参加が継続せず1回で終わってしまうも親子もいた。このような子どもの状況であるにも関わらず、母親達は、支援センターを目指し、講座の開始時間に合わせ、キャスターに子どもを乗せて来室していた。母親達は毎回笑顔で入室し、子どもと共に学生とのふれあいや活動を楽しみに参加をしていた。このように明るく元気な母親達であったが、今回の調査からは障害をもつ子どもの母親だけの悩みと葛藤を抱えている事も明らかになった。

重度の障害を持つ子どもと母親への寄り添いを実践する中で、支援センターで何が出来るかを模索の中で活動を実践し支援策を考え、継続してきた。母親達も支援センターの活動に参加しようと活動を楽しみにしていた。その中で抱える悩みは多く、確実に成長していく子ども達は半年前よりも身長、体重とも成長が見られ徐々に大きくなっていく。そのため子どもを抱きかかえて支援センターに入ってくる母親達の姿には、成長していく子どもの状況に大変さが見えていた。そのたびに母親達の姿から、子育てに向けた生活の不安が現れていた。子育ての悩みに対する解決策は、支える仲間と相談する等解決する方法を模索し得ていたが、母親達の思いには、個々の障害の違いや対応も異なり、

重度の障害がある子どもの育児に悩みながら子育てしている事も明らかになった。障害を持つ子どもであっても遊べる場所とそこで母親達が語れる環境を節に望んでいる事が明らかになった。

今後の支援センターの活動に望む事は、重度の子ども達が遊びに来れる場所と併せ母親達が語れる場所を作る事や障害がある子どもを持つ母親の悩みを聞きながら子育て支援をする必要性が示された。

IX. まとめ

研究1では日本語版POMSTMをベビーマッサージ講座の活動前後に実施し、親子の関わりから生じる母親の気分の変化を調査した。そして研究2では聞き取り調査と併せPACAP、PACAP-Bの尺度に用い、育児の悩みや育児不安など、母親の抱える課題の検討を行った。研究1では集団の中において、むしろ気になる親子への違和感に気づき、発見する力が必要であった。この周囲とは異なる関わりをしている親子に向けた別な支援策を昂じる必要がある。活動中に、親子の周囲とは異なる違和感に気づく、親子を発見する事や、解決策に向けて親子に一番必要な支援を提供する事が支援センターの役割機能であると考えた研究1では子どもの発達特徴に関する課題もあり、母親に子どもの発達に関する支援と同時に、基本的な関わりに着目し、親子で、1対1で築き上げていく情緒の絆作りの支援が含まれていた。言語的な関われる時間だけでなく同じ空間で、一緒にふれ合う時間をどのように共有していくかが1つ施策である事が伺われた。親子でふれ合う体感の心地よさが経験となり、親子の関係への改善に役立っていた。安心した時間を互いにつくり、こ

の関わりを充分確認する愛着形成が必要である事が示された。

研究2では重度の子どもを持つ母親の子育て支援の課題が示された。その中で助かった生命を受け止めながら、孤軍奮闘している母親達であった。支援センターに子どもをバギーに乗せて来る母親達は、いつも明るく遊び場所として喜んで子ども達を連れてきていた。

その笑顔の背景には言えない悩みも多く、子どもの将来にわたる支援策を悩みながら模索していた。特に聞き取り調査で得られた出産時の状況やかろうじて助かった命の重みと重度の後遺症を持ちながらも重度心身障害児である子どもを育てていこうとする母親の重みと語る内容があった。母親自身が語る母親同士を繋げて支える子育てが、母親達の原動力になっていた事も明らかになった。地域の子育て支援の提供は支援センターだからこそ出来た支援であると考えた。今回研究1、研究2を通して改めて支援の専門性や子育てを実践する役割の重要性について本学ならではの子ども・家族支援センターの役割の必要性が明らかになった。

X. 今後の課題と方向性について

支援センターの役割には、どのような状況であっても諦めずに育てていく母親達を応援する子育て支援が必要である。育児不安に悩みを抱える母親達には子どもの発達特性も大きく影響を及ぼしていた。そこからどのように親子の関係性を作り上げていくかが重要な課題である。夫々の状況が異なり、悩みの違いを大切に受け取り子育て支援する重要性が問われる。重い障害を持ち続ける子どもを育てている母親達には悩みと裏腹の思いをもって、子どもと一緒に楽しめる機会と場所を求め来室していた。

今後の活動においては共通して母親達は孤独を抱え、1人で抱え育児をしていた。子育ては1人ではなく皆で関わる子育てが求められている。親子の関係性にも感じられる専門性が重要な支援になる。同時に障害児を持つ母親だからこそ悩む思いに気づく事も必要である。そして今後は重度の障害を持つ子ども達が自由に遊びに行ける居場所づくりと母親達を支える仲間作り、そして語り合える場が求められている現状を踏まえ、全ての親子にむけた子育て支援の在り方や育児不安の解消や児童虐待予防策に繋がるように支援していきたいと思う。

参考文献

- 1) 千葉千恵美:乳幼児保育と子育て支援 改訂版.
風詠社, 1-84, 2023
- 2) 千葉千恵美:子育て支援と実践. 現代図書,
1-141, 2020
- 3) 後藤沙希, 千葉千恵美:子育て支援に受けた心理的支援の課題と展望について.
高崎健康福祉大学総合福祉研究所, 20, (1),
49-56, 2023
- 4) 千葉千恵美:児童虐待防止に向けた子育て支援
－社会保障審議会児童部会児童虐待等要保護事例
の検証に関する専門委員会(第17次報告)の分析
から－.
高崎健康福祉大学紀要, 22, 177-196, 2023
- 5) 後藤沙希, 千葉千恵美:子育て領域のソーシャル
ワークにおける心理的支援の課題 (1). 日本保
育ソーシャルワーク学会, 7, 29-43, 2021
- 6) 千葉千恵美:児童虐待予防にむけた支援方法.
高崎健康福祉大学総合福祉研究所紀要
健康福祉研究, 17, (1), 25-33, 2020

From child abuse prevention and problem-solving measures
in child-rearing support
– About support methods for parents and children
visiting the child and family support center on campus –

Chiemi Chiba¹⁾³⁾, Mitsuhiro Masaki²⁾³⁾, Maki Tomisawa³⁾, Mari Otsuka³⁾

¹⁾ Department of Child Education, Faculty of Human Development, Takasaki University of Health and Welfare

²⁾ Department of Physical Therapy, Faculty of Health Care, Takasaki University of Health and Welfare

³⁾ Child and Family Support Center, Takasaki University of Health and Welfare

Key Words : Child abuse prevention, Mother childcare anxiety, Characteristics of disability,
Childcare support

Summary

Since 2006, The Child and Family Support Center of Takasaki University of Health and Welfare has been providing support to residents near our university as a part of its community contribution efforts. In particular, we have a “Parent & Child Community Classroom” to relieve childcare anxiety and childcare stress, and have provided childcare support through parent-child play and childcare consultation for parents and preschoolers aged 0 to 3 years old.

This time, I will report on the effect of offering two courses. In Study 1, we introduced “Baby Massage Course” for two pairs of parents and children, and conducted a comparative study using the Japanese version of POMSTM before and after the activity.

In Study 2, we introduced “Parent & Child Community Class Requiring Therapeutic Guidance” for parents and children with severe disabilities, and used PACAP and PACAP-B in conjunction with interviews with the mothers of nine participating parent-child groups about their concerns about childcare.

In Study 1, significant changes in mothers’ moods were observed from the two parent-child pairs. In Study 2, three responses from three questions were extracted from the interviews, indicating the need for child-rearing support.